

# 史跡 伊勢国分寺跡



国分寺は天平13（741）年、聖武天皇の詔により各国に建てられた官営の寺院で、僧寺と尼寺が置かれました。伊勢国の国分二寺は鈴鹿市国分町に所在します。地形的には鈴鹿川左岸の標高43m前後の高位段丘上に位置し、眺望がよく、水害の恐れのない土地です。大正11年10月12日に、国分町字堂跡一帯の37,180㎡が史跡伊勢国分寺跡として指定されました。この遺跡が僧寺跡と考えられています。

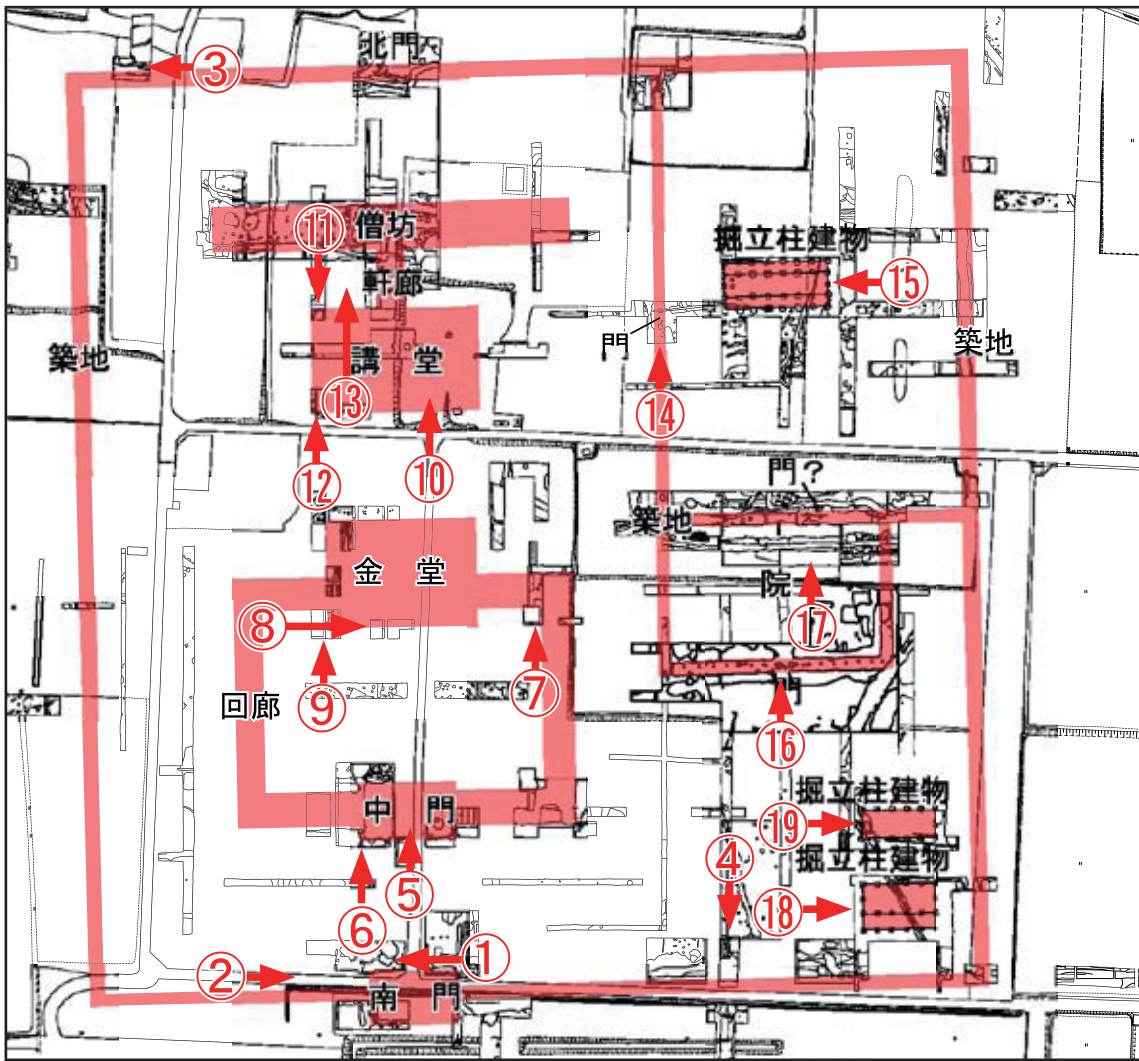
奈良時代中期の伊勢国の役所である国府は、鈴鹿市広瀬町で見つかっているため、約7kmと離れた位置関係にあり、国府は鈴鹿郡、国分寺は河曲郡と郡が分かれています。

鈴鹿市は昭和63年から史跡伊勢国分寺跡の範囲確認調査を実施しました。その成果をもとに、平成7年から3年間で全域の公有地化を行いました。平成11年からは史跡を歴史公園として整備するため、伽藍等の確認調査に着手しました。調査は平成20年に終了し、現在、整備工事を行っています。

ここでは、これまでの発掘調査で判明した主要な遺構と伊勢国分寺跡と関連の深い周辺の遺跡について紹介します。



# 発掘調査によって確認された伽藍配置



## 主な軒先瓦

単弁八葉蓮華紋軒丸瓦



II A 02 型式



II A 03 型式



II A 04 型式



II A 05 型式

均整唐草文軒平瓦



II B 01 型式



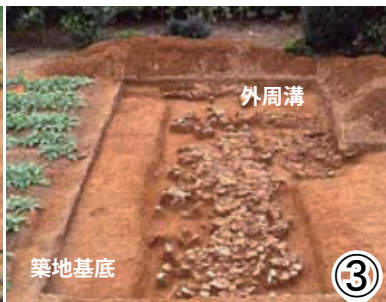
II B 02 型式

なんもんきだん

**南門基壇** 南門基壇は削平されていて、外周をめぐる溝から規模を復元しました。基壇は長方形の各隅を切り落としたような平面形をしています。規模は南北 11.2m × 東西 17.6m です。

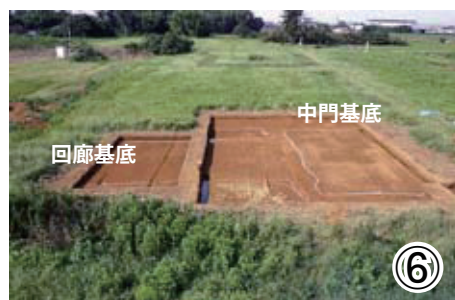
ついでい

**築地塀** 伽藍地は四周を築地塀に囲まれたほぼ 180 m 平方です。築地の残りは悪く基底も削平されていて、内外周の溝によってようやく確認できる状態でした。基壇底部幅は約 3 m です。



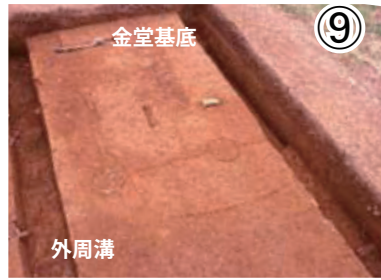
ちゅうもん かいろう

**中門・回廊基壇** 中門は南門から 26 m 離れています。回廊で金堂と結ばれています。回廊の規模は東西 68m × 南北 51 m で幅は約 7 m です。基壇は全く削平されていたため内外周溝から規模を復元しました。金堂と中門の基壇の距離は 31 m です。中門の基壇はかろうじて基礎地形の最下層が残存していました。規模は東西 19.5m × 南北 11.9m です。

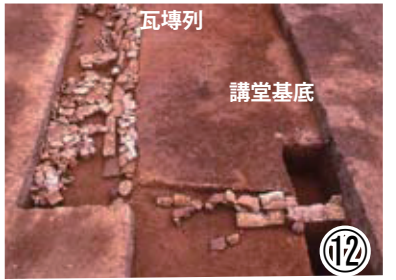


**塔** 国分僧寺には七重の塔を建てること定められています。そのため、さまざまな国分寺の伽藍配置を参考に確認調査を行いました。塔跡は検出されませんでした。すでに削平されてしまったという可能性もあります。また、伽藍地と考えてきた 180 m 平方の範囲外に塔院がある可能性を考え、さらに周辺の調査を行う必要性があります。

こんどう  
**金堂** 本尊が安置されたお堂です。創建期の基壇の規模は東西 30.5 m × 南北 21.9 m です。基壇の基礎地形（地盤改良）の版築がしっかり行われています。この基礎地形を切って新たな外周溝が掘られ、最低 1 回の大改修が行われたようです。



こんどう  
**講堂** 仏典の教説を行うお堂です。講堂の基壇は伽藍の中でも残りが良いのですが、それでも基壇最下部の瓦罫（レンガ）列と軒先から転落した瓦が残る程度でした。基壇の規模は東西 32.7 m × 南北 20.6 m と復元されます。金堂同様に基壇の外周を幅広い溝が巡ることが確認されています。金堂からは北に辺辺で 22 m 離れて立地します。



そうぼう  
**僧坊・北門** 僧坊は僧の宿舎で、金堂の北側に位置しています。東西 72 m × 南北約 9 m の長大な建物です。金堂とは幅 6 m、延長 12 m の軒廊で結ばれています。僧坊基壇から北辺築地までの距離は 25 m です。伽藍中軸線上で北辺の築地内溝が約 9 m 途切れることから礎石瓦葺建物の北門が存在したと推定しています。伽藍の中軸線は伽藍地の中心から西に約 25 m 偏り、約 1.5° 西に振れています。

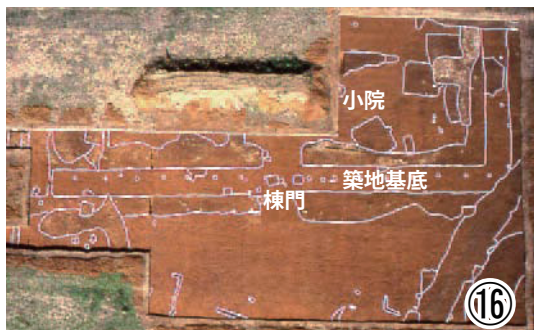
むなもん  
**北東院棟門** 北東院の講堂側では築地内溝が途切れ幅 3 m 間隔で掘立柱穴が 2 本立つことから、棟門が開いていたとみられます。

北東院内大形建物 北東の内部からは東西 7 間、南北 2 間の大形の二面廂（掘立柱）建物が検出されています。食堂といった施設の可能性がありますと考えられます。

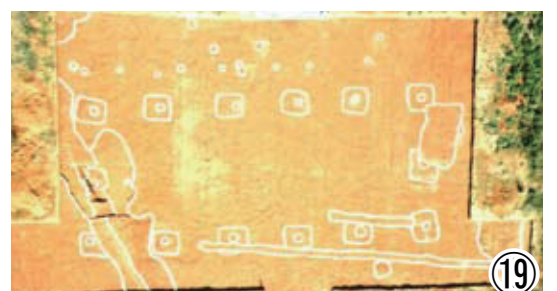


小院 北東院に先行する東西 45 m × 南北 30 m 以上の築地に囲まれた院です。この院内には一辺 27 m 四方の溝状の遺構が確認されており、金堂などに見られる建物の周りに掘られた溝と同様のものとすれば、この小院は塔院の可能性が考えられます。

北東院築地 寺城北東部は東西 68 m × 南北 90 m の築地塀で区画されて北東院を構成しています。北東院の南辺築地中央にも約 5 m の外（南）溝の途切れがあり、礎石瓦葺の門が存在した可能性が高いとみられます。



南東隅掘立柱建物 寺城南東隅には、東西 5 間 × 南北 2 間で南廂の掘立柱建物 1 棟と、その北側 9 m 離れて東西 5 間 × 南北 2 間の掘立柱建物が並列して建てられています。その役割については分かりません。



## 国分尼寺跡

尼寺は現在の国分町の集落の下に眠る国分遺跡だと考えられています。国分遺跡の北西部で寺域の区画とみられる東西方向の溝と掘立柱塀が見つかります②。隣接する国分西遺跡では瓦を捨てた大規模な土坑①や鍛冶の跡が見つかります。

## 南浦遺跡・廃寺（大鹿廃寺）

以前は国分集落の字南浦にある瓦の散布地が国分尼寺跡と考えられてきました。しかし、発掘調査を行ったところ出土するのは飛鳥時代末～奈良時代初頭の瓦が中心で④、国分寺から半世紀以上遡る白鳳寺院であるとみられます。在地豪族の氏寺として建立されたのでしょうか。しかし、まだ確実な伽藍の遺構は確認されていません。出土した瓦には補修に使われたとみられる新しいものもあり、奈良時代後半から平安時代の前半にかけて国分の一帯には3つの寺院が甍を並べていたのです。南側からは14棟以上の大形掘立柱建物が企画性を持って4回以上建て替えられているのが確認されています③。寺院の附属施設か豪族の居宅かと考えられています。

## 狐塚遺跡（河曲郡衙）

考古博物館の建設に先立ち、国分寺跡の南側を調査したところ、国分寺の南辺築地から約90m南において、東西方向の掘立柱塀が延長65m伸びているのが見つかりました。その南側からは大形の掘立柱倉庫が確認されました⑧。翌年実施された範囲確認調査では、北側では倉庫3棟（後に1棟発見追加）⑨が東西方向に、西側では倉庫5棟が南北方向に、南では2棟が東西方向にと、全11棟が匚状に整然と並んでいるのが確認され、この遺跡が奈良時代始めころの河曲郡衙（役所）正倉院（税として納められた稲を納める倉庫）であることがわかりました。正倉院から谷を挟んで150m東（現在の駐車場付近）には整然と配置された建物群⑤・⑥があり、おそらく郡衙の政庁ではないかと考えられています。また、その間（博物館の前庭）には掘立柱建物2棟が並列して建てられ⑦、倉庫や掘立柱建物が企画的に配置されていてこれらは郡衙の館（宿舎）や厨（厨房施設）とみられます。

これらの遺跡から、国分の地に国分寺が設置された背景として、河曲郡を支配し郡司を務めた在地豪族の権威と財力が鍵となったことが想定できます。

